

土尻遺跡 I

—宅地造成工事に伴う発掘調査報告書—

2012

株式会社 青山
甲府市教育委員会

序

本市南部一帯は、周囲を山塊に囲まれた甲府盆地の低地に位置しており、古くから湖水伝説などに見られるように、水との関わりが強い地域であります。明治 40 年に県下を襲った大水害では、当該地域一帯もまさしく湖水と化し、多くの尊い生命と財産が失われました。現在は治水整備が進み、過去の大きな洪水も歴史の一部となりつつありますが、埋もれた地層や遺跡に刻まれた土地の履歴を見つめ直すことで、私たちは悲劇を繰り返さないように学ぶことも大切なのではないでしょうか。

本書に収録しましたのは、甲府市下小河原町地内で実施いたしました土尻遺跡の発掘調査の記録をまとめたものであります。このたびの発掘調査では、室町時代の集落の一部とみられる溝や柱穴などとともに、当時の生活用品が多数出土いたしました。特徴的なものでは、鍛冶の際に火に風を送る道具として用いられた鞴の羽口や熔けた鉄屑など鍛冶屋に関わる出土品がありました。ちょうど本地点北側には「鍛冶屋敷」と呼ばれる古い字名が残されているようですので、室町時代に鍛冶職人たちの集落がこの一帯に存在した可能性が高いことを裏付ける資料として注目されます。

調査地点と近接する小瀬町には、中世の傀儡田楽の特徴を残すとされ、国の重要無形文化財の指定を受けている天津司の舞がございますが、時代的にはちょうど土尻遺跡の年代と近いこともありますので、こうした調査成果の積み重ねが本市南部の歴史や残された文化財の歴史背景を語る上で大きな意味を持ってくるのではないかと思います。

本書は、地域の歴史財産である遺跡の記録を後世に伝え、その成果を新たな歴史研究などに広く活用いただくことを目的に刊行しております。本市南部地域を語る歴史資料は少なく、この成果を教育の場など多方面でご利用いただければ幸いに存じます。

最後になりますが、このたびの発掘調査にあたり、格別のご協力を賜りました株式会社青山に厚く御礼申し上げますとともに、本市の文化財保護行政につきまして、ますますのご理解とご助力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成 24 年 3 月

甲府市教育委員会
教育長 長谷川 義高

例　　言

1. 本書は、山梨県甲府市下小河原町字土尻地内に所在する土尻遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、宅地造成工事に伴う発掘調査であり、株式会社青山の協力を得て甲府市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、甲府市教育委員会文化振興課 佐々木満（文化財主事）が担当した。
4. 本書に係る経費等は、株式会社青山の負担で実施している。
5. 発掘調査の期間及び面積は以下の通りである。
期　間：平成 23 年 4 月 19 日～平成 23 年 5 月 18 日　面　積：約 107 m²
6. 本書の執筆は佐々木満が行い、遺物の実測・トレース作業は栗田かず子・分部綾子が行い、他の作業を佐々木満が行った。
7. 出土品の保存処理業務については、（財）山梨文化財研究所に委託した。
8. 本書の編集は、中澤義明（文化振興課長）を責任者とし、佐々木満が行った。
9. 本書に係る出土遺物及び記録図面、写真などは甲府市教育委員会で保管している。
10. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、次の機関及び諸氏からご指導・ご教示・ご協力を賜った。
記して厚く感謝申し上げる。（敬称省略）
（財）山梨文化財研究所 鈴木 稔・畠 大介
11. 発掘調査参加者
影山三亜次 久保田文武 小池幹子 佐藤美喜男 田中博之 宮原雄二 萩原忠 渡辺百合子

凡　　例

1. 本書に掲載した地図は、平成 22 年度甲府市都市計画図 2500 分の 1 を用いた。
2. 遺構断面土層の色調及び遺物観察表中の色調は、『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1997 後期）に基づいている。
3. 遺構・遺物の実測図縮尺は、基本的には溝跡 1/40、土坑 1/40、出土遺物 1/3 であるが、大型の遺構や陶磁器・石製品には例外もあるため、図中に示した各スケールを参照願いたい。
4. セクション図に表記されている水平線の数値は、海拔高度を表し、単位は m である。
また、セクションポイント表記の E・W・S・N は、東西南北を表している。
5. 遺物実測図で反転復元したものについては、実測部分と復元部分の間にスペースを設けているが、全体を反転復元したものについては、中央線部でスペースを設けて区別した。
6. 本書作成に際して引用・参考にした文献は、一括して本書第 4 章末尾に記載した。
7. 本書に使用した記号及びスクリーントーンは、以下のとおりである。

炭化物・煤

熔融物付着

目 次

序

例 言・調査組織・凡 例

目 次

挿図・挿表目次

第1章 土尻遺跡の概要	1
第1節 立地環境	1
第2節 歴史背景	1
第2章 調査の概要	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 試掘調査と基本層序	3
第3節 調査の方法	4
第4節 調査の経過	4
第5節 調査後の事務手続きと整理作業	4
第3章 遺構と遺物	5
第1節 調査区1	5
第2節 調査区2	6
第4章 考 察	14
土尻遺跡の調査成果と課題	
第5章 結 語	15
写真図版	16

搜図・搜表目次

図1 土尻遺跡位置図	2
図2 調査区1 全体図	5
図3 調査区2 全体図	8
図4 調査区2 溝跡・土坑・Pit	9
図5 土尻遺跡出土遺物1	10
図6 土尻遺跡出土遺物2	11
図7 土尻遺跡出土遺物3	12
表1 出土遺物観察表	13

第1章 土尻遺跡の概要

第1節 立地環境

土尻遺跡が所在する甲府市下小河原町一帯は、甲府市南部に位置し、標高1000mを超える山塊に囲まれた甲府盆地中央の低地部に立地する。低地部一帯の標高は240m～350m前後であり、土尻遺跡周辺の標高は255mである。逆三角形を呈する盆地の北西部からは釜無川、北東部から笛吹川の大河が南流し、秩父山地や御坂山地など盆地を囲む山塊を源流とする中小河川が各所で合流して太平洋に注ぐ富士川となって南流している。

しかし、これらの河川は今日までに多くの洪水を引き起こし、その都度盆地低地部に多量の土砂を運び、盆地中央部では細粒土砂を主体とする低地が発達した。土尻遺跡周辺も洪水常襲地域であり、度重なる洪水により埋没が進んだと考えられ、現状では旧地形も含めた遺跡包蔵地の把握も難しい。そのため、甲府市南部は遺跡数も少なく、発掘調査事例も限られていることから、考古資料からのアプローチには限界があった。

第2節 歴史背景

土尻遺跡が立地する下小河原町は、もとは隣接する上小河原町・中小河原町と一つで巨摩郡に属しており、「小河原」と呼ばれていた。記録では長禄元年（1457）に守護武田氏の勢力と守護代跡部氏との間で行われた合戦が「小河原」で行われていることが確認される。天正11年（1583）に徳川氏から広瀬美濃守へ発給された領地安堵の書状中に「小河原」がみえることから、その頃まで一体であったようであるが、その後、天正20年（1592）年の加藤氏から身延山へ出された免許状には「上小河原」とみえることから、天正年間に荒川の流路変更等があったためか上小河原とほかの地域が分断され、さらに中と下に分村されたようである。

地域を知るための手掛かりとなる記録等は乏しく、下小河原村の様子がわかる史料は、慶長6年（1601）検地帳からとなる。同地内には駿河へと通じる中道往還が縦断しており、その周辺に集落が展開していたようである。甲府市住吉五丁目地内に所在する日吉神社は、かつて下小河原村内で山王権現と呼ばれ、武田家の庇護を受けていたと伝わる。正徳3年（1713）に現在地に移され、甲斐国主となっていた柳沢家の庇護を受けて社殿が整備されたが、それ以前の故地は不明である。

下小河原町周辺では、東に上町（上村）、西に中小河原町（中小河原村）、北に住吉（畔村）、南に小瀬町（小瀬村）がある。小瀬町はかつて稻積庄小瀬村と称し、承久の乱の際に首謀者の一人とされる源有雅が小笠原長清に処刑された場所として知られ、鎌倉時代には集落が形成されていたと考えられる。室町時代にも同地域内において武田氏一族の活動の痕跡があり、甲斐守護武田信重の弟であった宮内大輔信賢の館と伝わる小瀬氏館跡や武田信長を開基、信賢を大檀那とする仁勝寺などがある。小瀬氏館跡については、昭和61・62年に五割川改修工事に伴い試掘調査を実施しており、13世紀初頭から15世紀代の遺物等が出土していることから、史実にある年代観と概ね合致する成果が得られている。

調査対象となった土尻遺跡については、平成10年度に農道改良工事に伴い試掘調査を実施している。東西方向に試掘トレンチを設定して調査を実施したが、今回の調査地点一帯で中世以降の遺物等が出土している。その際に鍛冶関係の熔けた鉄滓など出土しており、付近に鍛冶職人の居住が想定される成果を得た。年代的には概ね15世紀段階の遺物群があり、隣接する小瀬氏館跡の年代観と重複してくる成果が得られたことから、その関連性も含め、これまで不明確であった甲府盆地低地部の様相の一端が明らかとなりつつある。

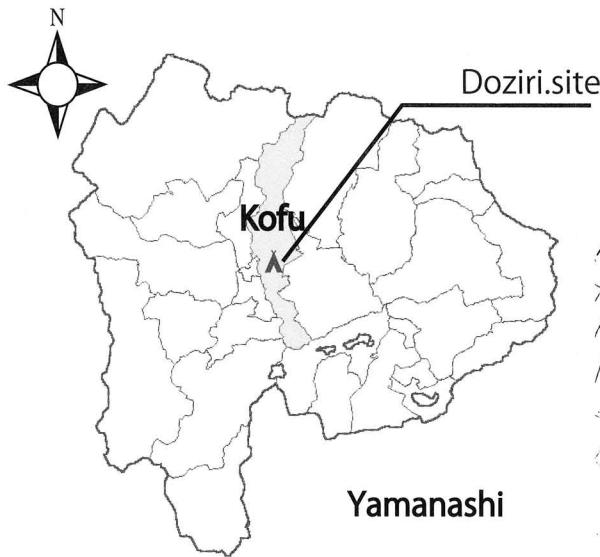
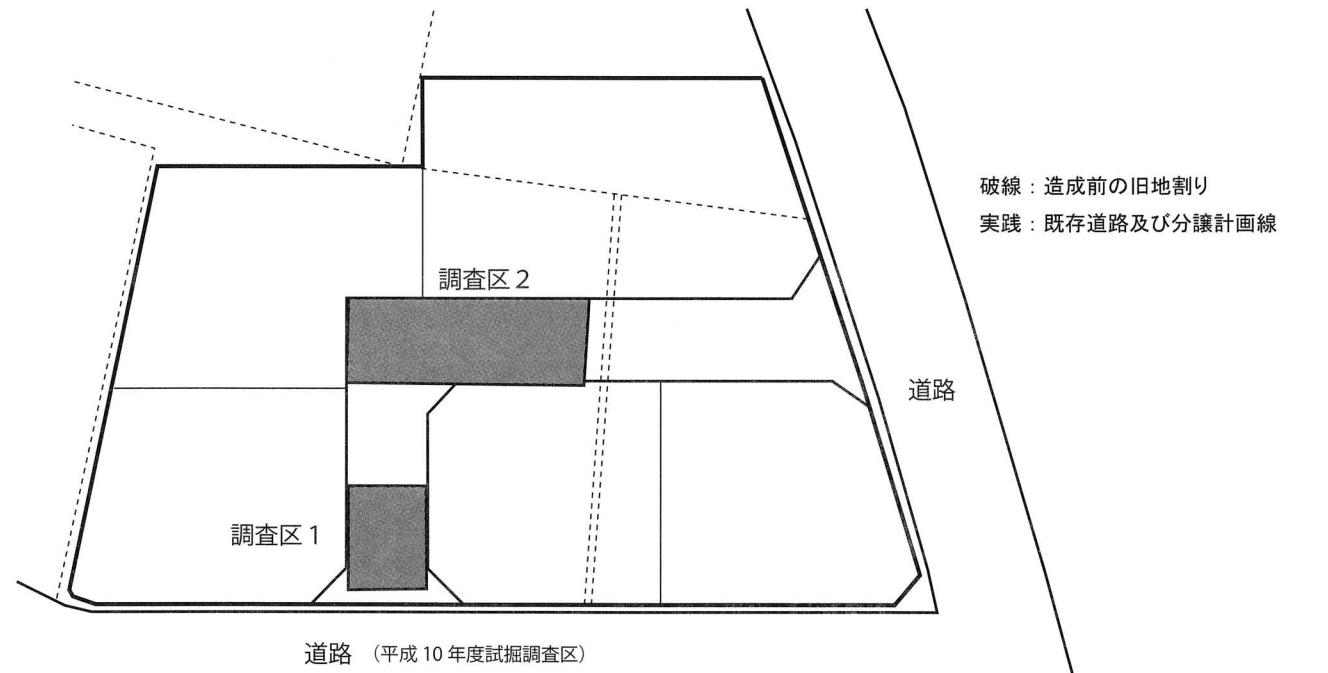


図 1 土尻遺跡位置図

上：調査対象区

下：調査区配置



第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

周知の埋蔵文化財包蔵地である土尻遺跡の範囲内に位置する甲府市下小河原町 36-1、38-1、58-1において計画された宅地造成に先立ち、平成 23 年 3 月 31 日付けで株式会社青山（以下、「事業者」という）より文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出された。

平成 23 年 4 月 14 日付け教文第 200 号で周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について通知が出され、開発に先立ち試掘調査を実施することとなった。通知を受けて甲府市教育委員会と事業者との間で協議し、遺跡の有無や時代、範囲、内容などを確認するための試掘調査を実施することとなった。

試掘対象面積は約 1420 m²であり、道路建設予定地内を平成 23 年 4 月 19 日から 4 月 26 日までの期間内に 6 日間の調査を実施した段階で状況を事業者に報告し、今後の取り扱いについて具体的な協議を行った。

造成計画が遺跡に与える影響を確認した結果、宅地部分は盛土等により保護されることが確実であることが確認された。道路部分については、遺物は一定量の出土はあったものの、遺構密度は薄く、その時点での試掘調査箇所を除く残り面積がそれほど大きくなかったため、試掘調査の延長で対応することとし、事業者からは出土遺物の整理と報告書作成費用を負担いただくことで合意した。

よって、引き続き平成 23 年 5 月 10 日から 5 月 18 日の期間内で 5 日間を要して調査し、合計で開発予定地全体の約 7.5% に当たる約 107 m² の面積を試掘調査した。調査終了後の埋め戻し等の作業は、事業者側で行っており、その後の隣接地との境界部の擁壁工事や道路工事等は立ち会いを実施した。試掘調査終了後に概要報告書を提出し、全体の内容がある程度明らかになった段階で、整理作業及び報告書作成に関わる業務について、平成 23 年 9 月 28 日付けで業務委託契約を締結した。

第2節 試掘調査と基本層序

土尻遺跡では、平成 10 年度に本地点に南接する農道改良工事に先立ち試掘調査を実施し、室町時代後半の土器等が出土している。出土遺物の中には鍛冶の際に排出される鉄滓などが出土したことから、周辺に鍛冶関連施設が存在する可能性が推測された。

本地点はその北側に位置しており、同様の状況が確認されると想定して、平成 10 年度調査時に遺物が出土していた西側を中心に試掘調査を実施することとした。調査対象地内へは宅地造成に伴い幅 5 m で L 字型に道路が設定される計画であったことから、調査対象を確実に掘削が及ぶ道路部分とした。調査対象地とした L 字型の道路予定地のうち、平成 10 年度調査区と接する南北方向を調査区 1 とし、調査対象地中央付近に設定した東西方向のトレンチを調査区 2 とした。

その後、試掘調査後半において調査区 2 をさらに西側へ延長して調査区 3 として調査したが、最終的に東西方向の調査区は、一つのつながった調査区となったことから、本書ではまとめて調査区 2 として報告することとした。

基本層序は、調査対象地一帯が盆地低部の洪水常襲地域であることもあり、土質は粘性が弱い砂粒を主体とする砂質土で形成されていた。表層の水田層は、黒褐色系の耕作土が約 20 cm～25 cm 程度あり、直下に暗黄褐色系の水田床土層が約 5 cm～10 cm ほど堆積していた。床土直下では場所によって有無は見られたが、5 cm ほどの薄い暗オリーブ褐色土層が確認され、その下層に遺物を含む黒褐色土層が全体的に検出されたことから、黒褐色土層を包含層と判断して確認作業を行った。

第3節 調査の方法

調査区は、基本的に計画道路幅に沿って水田造成層約30cmを重機によって掘削し、それより下層を人力によって遺物の取り上げや遺構の確認作業を実施した。試掘調査対応としたため、座標の測量などは実施しておらず、調査区の座標値等の詳細な情報を欠いている。標高については、造成図設計時の測量値を利用している。

遺構については、調査区全体を通して遺構の性格毎に番号を付しており、調査方法は、土坑・Pitなどは基本的に半截して土層を確認した上で遺構であるか判断し、完掘作業を行った。半截した断面と完掘時の平面は、写真と図面により記録した。溝跡など規模が大きな遺構については、任意に部分的な土層観察面を設けて確認し、その後に写真と図面により記録した。

遺物については、重機による掘削時の遺物は、調査区毎に一括して取り上げ、人力掘削時は基本的に直径3cm以上の遺物は、調査区毎に出土位置を計測し、それ以外のものは調査区毎に一括で取り上げている。遺構内出土遺物も同様に取り扱っている。

第4節 調査の経過

試掘調査は、平成23年4月19日から4月26日までの期間内で調査区1・2を調査し、平成23年5月10日から5月18日の期間内で調査区3（本報告では調査区2）の調査を実施した。調査期間中の主な作業と進捗状況は以下のとおりである。

- 4月19日 機材等準備・搬入作業。調査区設定。
- 4月20日 試掘調査着手。調査区1・2を重機により掘削。
- 4月21日 調査区1掘削。
- 4月22日 調査区1精査、遺構確認。調査区2掘削。
- 4月25日 調査区1図面作成、遺物取り上げ。調査区2精査、遺構確認。土坑・Pit掘削。
- 4月26日 溝跡・土坑・Pit掘削。
- 5月10日 調査区3を重機により掘削。
- 5月13日 排水作業、調査区3掘削。
- 5月16日 排水作業、調査区3精査、遺構確認。溝跡・西側湿地掘削。
- 5月17日 遺物取り上げ、全体精査、全体写真撮影。
- 5月18日 図面作成、補足調査、現場撤収。

第5節 調査後の事務手続きと整理作業

発掘調査によって得られたプラスチックコンテナ1箱分の出土遺物は、平成23年5月23日付けで甲府警察署長宛に遺失物法に基づく埋蔵物発見届を提出するとともに、山梨県教育委員会教育長へ保管証を提出し、平成23年6月20日付け教学文第846号により出土品の帰属と文化財としての認定がなされた。合わせて、試掘調査成果については、本書に先駆けて概要報告書をまとめ、平成23年5月30日付け教発第407号で事業者に提出した。

室内整理作業及び報告書作成作業については、甲府市山宮甲文館において現場での記録等の整理作業とともに、遺物の実測・写真撮影等を実施し、本書の刊行に至っている。その際に現場段階で記録した遺構番号を次のように変更した。

（旧→新） 1号溝跡→3号土坑 2号溝跡→1号溝跡 3号溝跡→2号溝跡

第3章 遺構と遺物

調査区1（全体図：図2）

調査区1は、幅約5m、南北方向に長さ約6.5mの規模で調査し、最終的な遺構確認面は、粗粒砂層上で行っているが、明確な遺構は検出されていない。粗粒砂層には礫石の混入はないことから、河川本流の堆積ではなく、あくまで付近に存在した河川の氾濫による一時的な増水で運ばれてきた堆積砂と考えたい。

遺物の多くは粗粒砂層上位で出土したものであり、時期的には概ね中世後半段階の遺物群であった。出土状況は散発的であったが、調査区全体から出土しており、破片には流された痕がないことから、隣接地で使用されたものが廃棄されたと推測される。図示していないが、隣接する平成10年度調査区同様に鉄滓塊が複数出土していることから、鍛冶関連遺構が付近に存在したことを示すと考えられた。

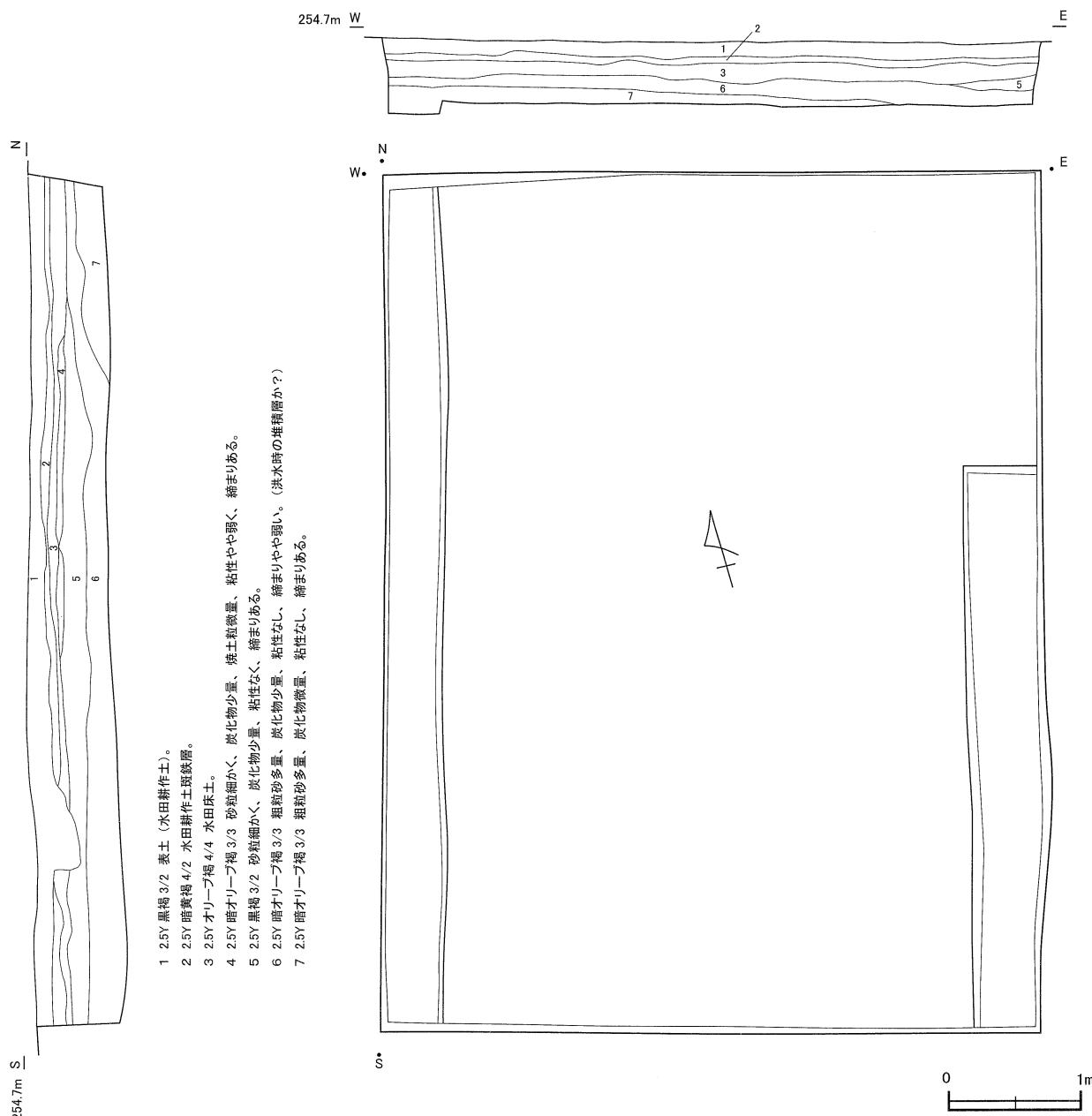


図2 調査区1全体図

調査区2（全体図：図3）

調査区2は、幅約5m、東西方向に長さ約15mの規模で調査し、砂質の安定した黒褐色土上で遺構確認を行った。検出された遺構は、溝跡2条、土坑3基、Pit5基が検出されており、すべて調査区2に限定されている。

その他、遺構とは別に調査区北東側では過去に発生した地震による液状化現象の痕跡とみられる噴砂跡が発見された。噴砂の範囲や規模はそれほど大きなものではないが、下層に堆積した砂層から噴き上がっていることが断面観察で確認された。噴砂発生の年代については、遺構確認面から上層の水田層などに達しておらず、遺構覆土内に割り込んだ形跡がないことなどから、検出された遺跡が嘗まっていた時期から水田造成以前に発生した地震によるものと推測される。したがって、中世後半から遅くとも近代までに発生した大地震による影響と考えられる。

1号溝跡（遺構：図4 遺物：図5）

位置：調査区2中央

検出状況：東西方向に細長い溝状の遺構であり、長さ約3m、幅約0.6mであり、中央部がやや深く掘り下げられていた。幅約両端部が調査区内で途切れていることから、通水を目的とした水路ではなく、溝状に掘り込まれた何らかの施設跡と考えられる。

重複関係：なし。

出土遺物：掲載遺物は1の内耳鍋であるが、他にかわらけなどが出土している。

2号溝跡（遺構：図4 遺物：図5）

位置：調査区2西側

検出状況：調査区を南北方向に縦断する溝跡であり、全長は調査区外に延びるため不明であるが、調査区北側で施工された仮設道路工事の際の立会で延長の一部を確認したことから、少なくとも調査対象地内を縦断している可能性が高いと考えられた。幅は約1.2mあり、U字状の溝跡で、底部に細粒砂層が形成されていたことから、流水のあった水路と考えられた。

重複関係：なし。

出土遺物：比較的まとまった量の遺物が出土しているが、掲載遺物は、2の土釜と3のかわらけである。ほかにかわらけや土師質の擂鉢、熔融した鉄滓などが出土している。また、動物か人骨かは定かではないが、骨も出土している。

1号土坑（遺構：図4 遺物：図5）

位置：調査区2中央

検出状況：遺構確認に際して最初に確認された小判型をした隅丸長方形の土坑であり、規模は、南北方向に長さ約2.2m、幅約1.25mであった。浅い土坑ではあったが、全体的に炭化物や灰、焼土の集中箇所がみられ、底部付近ではかわらけなどがほぼ完形に近い状態で出土した。検出状況から判断して鍛冶関連の遺構ではなく、むしろ火葬墓または火葬施設ではないかと考えられたが、骨片などは出土していないため、断定は避けたい。

重複関係：3号土坑・Pit5より新しい。

出土遺物：4・5のかわらけと6の内耳鍋ほか破片が数点出土している。

2号土坑（遺構：図4 遺物：掲載なし）

位置：調査区2東端

検出状況：調査区東壁で確認された土坑で、隅丸長方形の平面形と考えられる。規模は、幅は不明であるものの、長さは 2.1m である。遺構の用途を示す明確な痕跡や遺物はなかった。土坑底部の地山は礫を含む粗粒砂層であり、平成 10 年度の試掘調査成果でも調査区東側には河川か氾濫時の流路が入った形跡があり、それを裏付けるものと考えられる。

重複関係：なし。

出土遺物：かわらけなどが微量出土している。

3 号土坑（遺構：図 4 遺物：図 5）

位 置：調査区中央

検出状況：調査前半段階では溝跡としていたが、西側の拡張した調査区側にそれほど延びなかったことから、土坑として扱うこととした。1 号溝跡と併行するように東西方向に長さ約 2.85m、幅約 1.1m の規模である。

重複関係：1 号土坑より古い。

出土遺物：掲載遺物は 7 の五輪塔の部材であり、他にかわらけが少量出土している。

Pit（遺構：図 4 遺物：図 5）

調査区東側で合計 5 基の Pit が検出されている。そのうち、Pit 1・2・5 は掘り形もしっかりしており、柱穴として掘られたものであると考えられた。遺物は、Pit 3・5 からそれぞれ 8 と 9 のかわらけが出土している。

湿地跡（遺構：全体図 遺物：図 6）

調査区西側で確認された落ち込み以西からは、植物や樹木枝などの堆積があり、土質もやや粘性を持っておりとから湿地と判断した。流れ込みか廃棄によるものかは不明であるが、遺物等も比較的多く出土している。

遺構外出土遺物及びその他（遺物：図 5・6）

今回出土した土器・陶磁器は、概ね中世後半段階のものが主体を占めているが、掲載したものも含め、土器製品が多いことが特徴である。擂鉢は瓦質と土師質があり、内耳鍋も擂鉢に比べて少量ではあるが、比較的薄い甲斐型鍋と信濃型鍋がある。鍛冶遺物では、27 の熔融物付着土器や 41 の轍の羽口、20・42・43・44 の砥石や磨石などが出土している。その関連では掲載できなかつたが、鉄滓が多量に出土している。陶磁器では古瀬戸後期段階の遺物が多い中で、1 点のみ 37 の大窯段階の灰釉皿が出土している。38 の志野皿は上層からの出土であり、40 は須恵器の瓶であろうか。金属製品では 45 は 4 本ほどの釘など長細い鉄製品が重なっていたものである。50 の銅製品は小破片であるものの、形態的に和鏡と思われ、51 はさし錢が出土している。

その他、未掲載品であるが、木製品では漆椀が 2 点出土しており、1 点は木地が腐食して塗膜のみが潰れた形で出土し、1 点は体部の破片のみであった。

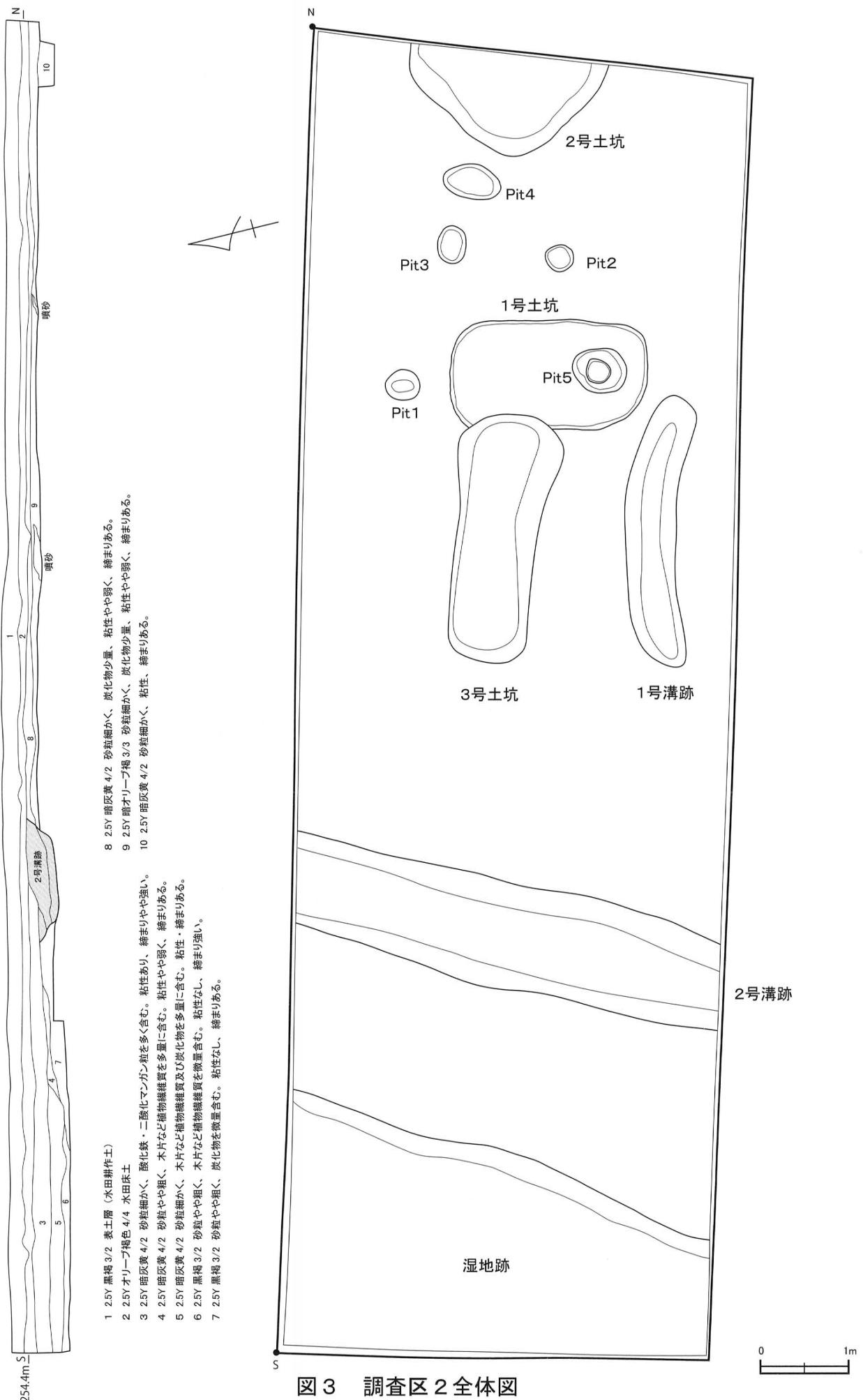


図3 調査区2全体図

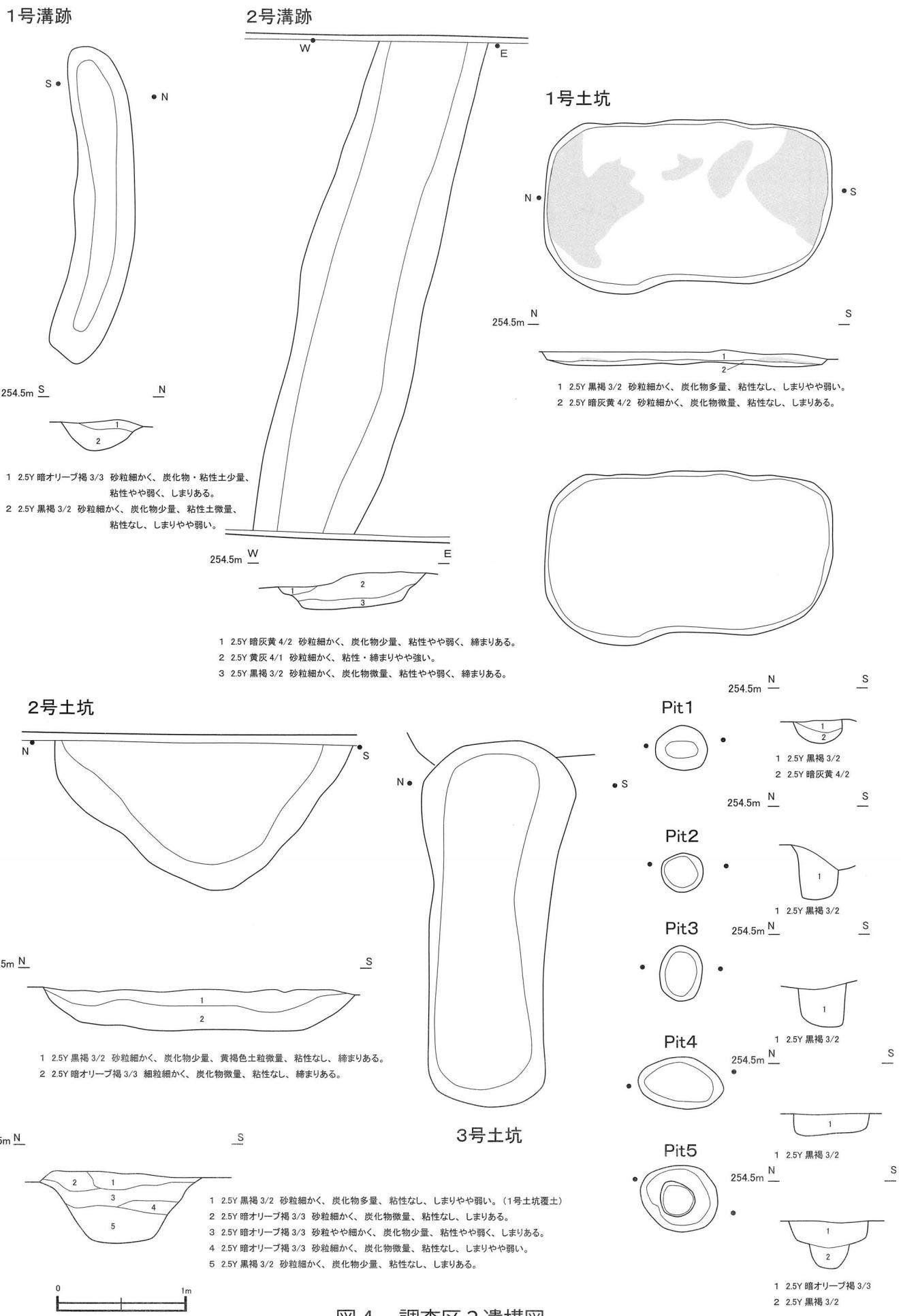


図4 調査区2遺構図

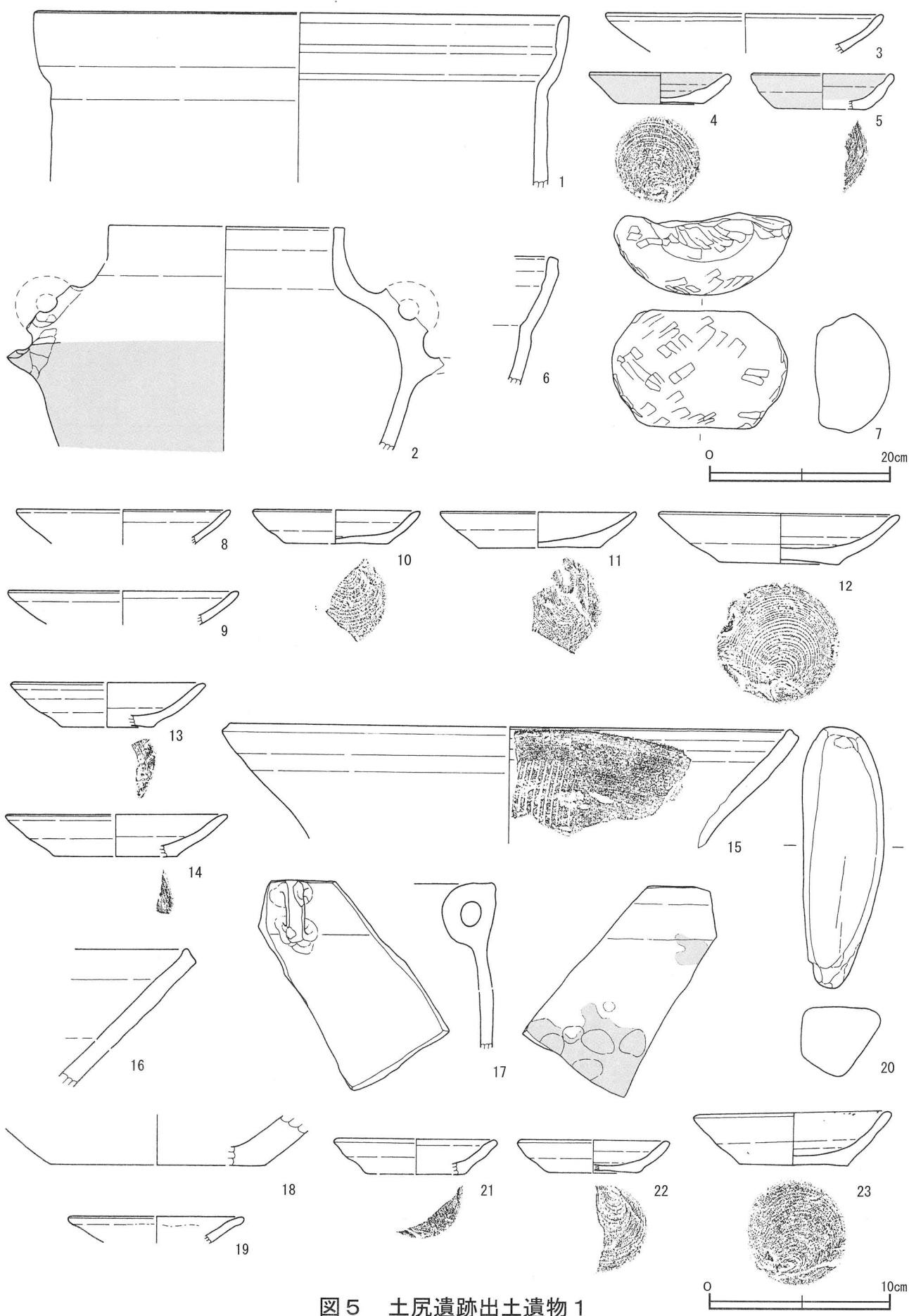


図5 土尻遺跡出土遺物 1

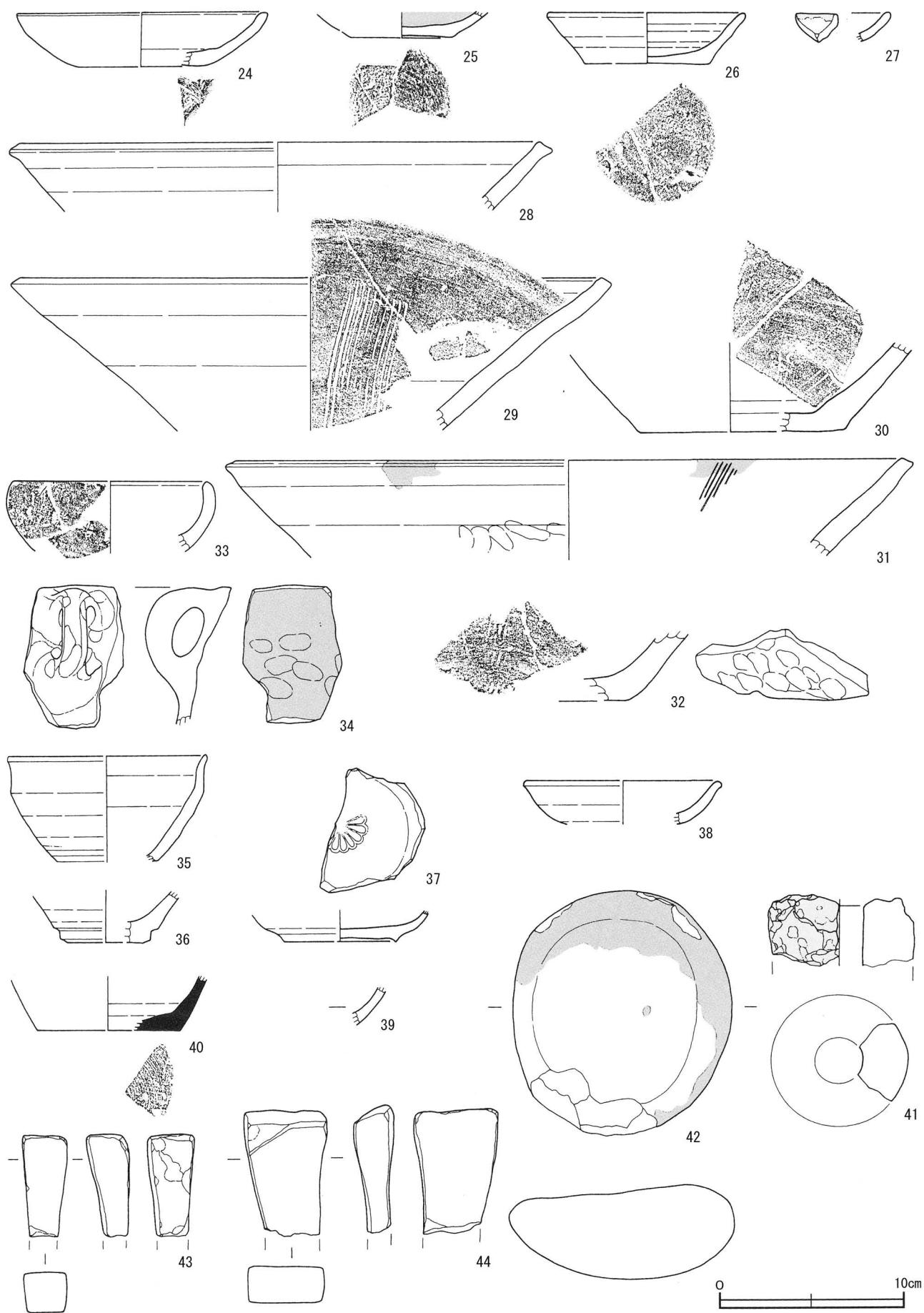


図6 土尻遺跡出土遺物2

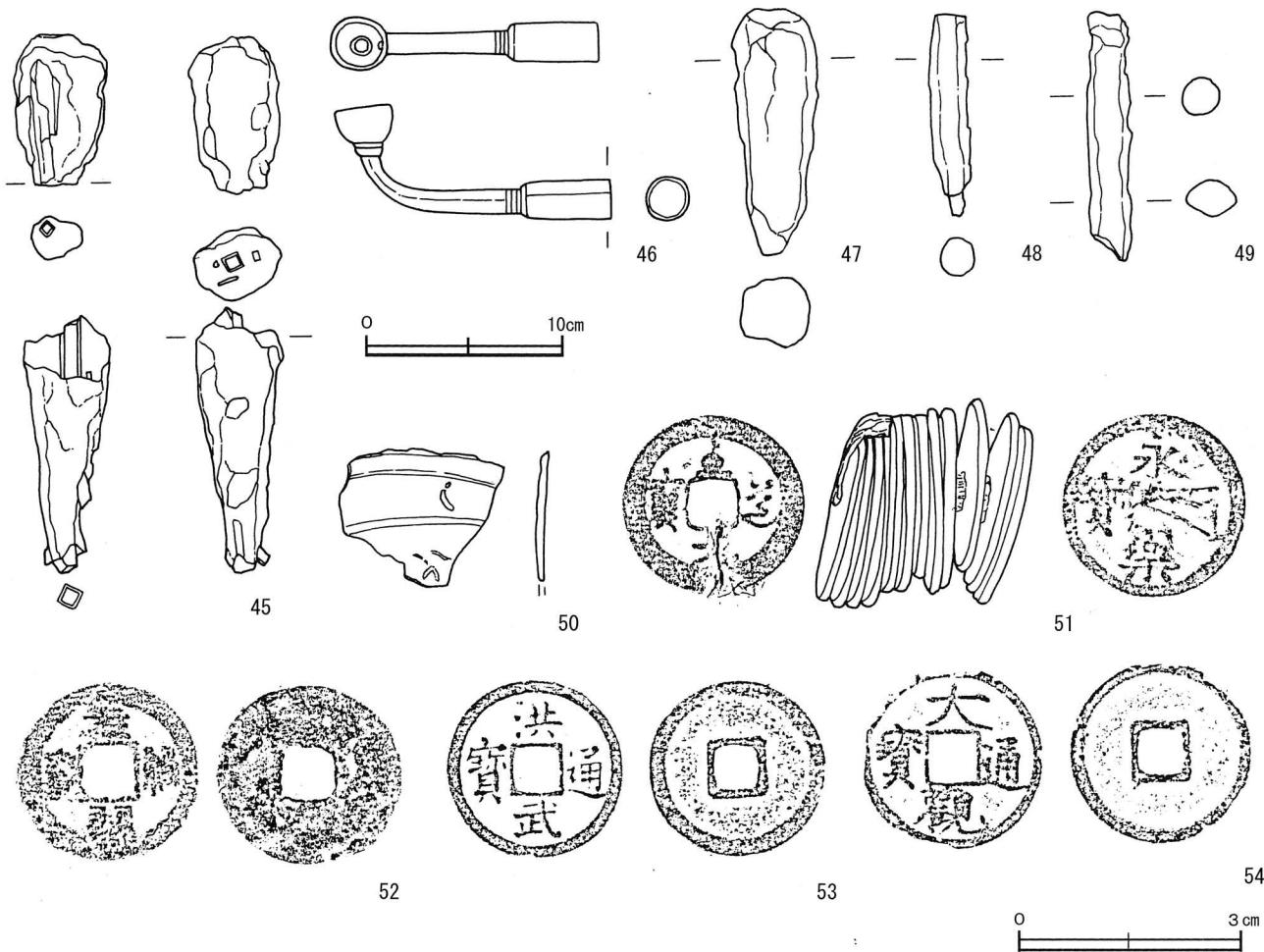


図7 土尻遺跡出土遺物3

出土遺物観察表

単位: cm 重さ g

図版番号	番号	位置・遺構	種類	器種等	生産地等	法量				色調	焼成	備考
						口徑	器高	底径	径			
図5	1	1号溝跡	土器	内耳鍋	在地	(29.4)	-	-	7.5YR 橙6/6	良好		
図5	2	2号溝跡	土器	土釜	在地	13.1	-	-	10YR 鈍い黄橙7/3	良好		
図5	3	2号溝跡	土器	かわらけ	在地	(14.4)	-	-	2.5Y 浅黄7/3	良好		
図5	4	1号土坑	土器	かわらけ	在地	(7.8)	(2.0)	(4.8)	7.5YR 橙6/6	良好		
図5	5	1号土坑	土器	かわらけ	在地	7.5	1.8	4.8	7.5YR 鈍い橙6/3	良好		
図5	6	1号土坑	土器	内耳鍋	在地	-	-	-	5YR 橙6/6	良好		
図5	7	2号土坑	石製品	五輪塔	在地	高さ13.2	幅19.5	-	-	-	-	-
図5	8	Pit 3	土器	かわらけ	在地	(12.6)	-	-	5YR 橙6/6	良好		
図5	9	Pit 5	土器	かわらけ	在地	(14.5)	-	-	5YR 橙6/6	良好		
図5	10	調査区1	土器	かわらけ	在地	(9.0)	1.8	(5.6)	2.5Y 灰黄7/2	良好		
図5	11	調査区1	土器	かわらけ	在地	(10.8)	2.0	(7.0)	5YR 明赤褐5/6	良好		
図5	12	調査区1	土器	かわらけ	在地	13.0	2.8	6.5	10YR 鈍い黄橙6/4	良好		
図5	13	調査区1	土器	かわらけ	在地	(10.5)	2.5	(5.2)	7.5YR 鈍い橙7/4	良好		
図5	14	調査区1	土器	かわらけ	在地	(12.0)	2.3	(6.8)	7.5YR 橙7/6	良好		
図5	15	調査区1	土器	擂鉢	在地	(36.0)	-	-	10YR 灰黄褐6/2	良好		
図5	16	調査区1	土器	擂鉢	在地	-	-	-	7.5YR 橙6/6	良好		
図5	17	調査区1	土器	内耳鍋	在地	-	-	-	7.5YR 橙7/6	良好		
図5	18	調査区1	陶器	捏鉢	東海か?	-	-	(9.0)	5Y 灰白7/1	良好		
図5	19	調査区1	陶器	灰釉皿	瀬戸美濃	(9.6)	-	-	2.5Y 灰白8/2	良好		
図5	20	調査区1	石製品	磨石	在地	長さ14.7	幅4.6	厚さ3.8	-	-	-	河原石転用
図5	21	調査区2	土器	かわらけ	在地	(8.6)	2.0	(5.4)	7.5YR 鈍い橙6/4	良好		
図5	22	調査区2	土器	かわらけ	在地	(8.1)	1.8	5.0	7.5YR 鈍い橙6/5	良好		
図5	23	調査区2	土器	かわらけ	在地	10.5	3.1	6.0	7.5YR 橙6/6	良好		
図6	24	調査区2	土器	かわらけ	在地	(13.6)	3.0	(7.0)	7.5YR 浅黄橙8/4	良好		
図6	25	調査区2	土器	かわらけ	在地	-	-	5.7	10YR 鈍い黄橙7/3	良好		
図6	26	調査区2	土器	かわらけ	在地	(10.7)	2.8	(6.9)	7.5YR 鈍い橙7/4	良好		
図6	27	調査区2	土器	かわらけ	在地	-	-	-	N 灰6/	良好	熔融物付着	
図6	28	調査区2	土器	擂鉢	在地	(28.6)	-	-	7.5YR 鈍い黄橙7/4	良好		
図6	29	調査区2	土器	擂鉢	在地	(32.0)	-	-	10YR 鈍い黄橙7/3	良好		
図6	30	調査区2	土器	擂鉢	在地	-	-	(11.4)	10YR 褐灰5/1	良好		
図6	31	調査区2	土器	擂鉢	在地	(36.8)	-	-	2.5Y 灰黄7/2	良好		
図6	32	調査区2湿地跡	土器	擂鉢	在地	-	-	-	2.5Y 灰黄7/2	良好		
図6	33	調査区2	土器	香炉	在地	(10.7)	-	-	5Y 灰白7/1	良好	印刻	
図6	34	調査区2湿地跡	土器	内耳鍋	在地	-	-	-	10YR 灰黄褐6/2	良好		
図6	35	調査区2	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	(11.2)	-	-	2.5Y 灰白8/2	良好		
図6	36	調査区2	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	-	-	(4.0)	5Y 灰白8/1	良好		
図6	37	調査区2湿地跡	陶器	灰釉皿	瀬戸美濃	-	-	(6.2)	5Y 灰白7/1	良好	印花	
図6	38	調査区2	陶器	志野皿	瀬戸美濃	(10.6)	-	-	5Y 灰白8/2	良好		
図6	39	調査区2湿地跡	磁器	青磁	中国	-	-	-	N 灰白8/	良好		
図6	40	調査区2湿地跡	土器	須恵器	在地	-	-	(8.0)	2.5YR 灰赤4/2	良好		
図6	41	調査区2	土器	轆の羽口	在地	-	-	-	5YR 橙6/6	良好		
図6	42	調査区2	石製品	磨石	在地	長さ13.6	幅12.2	厚さ4.9	-	-	-	河原石転用
図6	43	調査区2	石製品	砥石	在地?	長さ5.5	幅2.4	厚さ2.2	-	-	-	
図6	44	調査区2	石製品	砥石	在地?	長さ6.8	幅4.6	厚さ2.0	-	-	-	
図7	45	調査区2	金属製品	釘ほか	-	長さ11	幅2.4	重さ25.4	-	-	-	
図7	46	調査区2	金属製品	キセル雁首	-	長さ7.1	幅1.0	重さ11.4	-	-	-	
図7	47	調査区2	金属製品	釘	-	長さ3.3	幅1.0	重さ4.3	-	-	-	
図7	48	調査区2	金属製品	釘	-	長さ2.7	幅0.4	重さ0.8	-	-	-	
図7	49	調査区2	金属製品	釘	-	長さ3.3	幅0.5	重さ1.5	-	-	-	
図7	50	調査区2	金属製品	和鏡	-	-	-	重さ2.0	-	-	-	
図7	51	調査区2	金属製品	さし錢	-	長さ2.6	-	重さ41.1	-	-	-	永楽他計12枚
図7	52	調査区2	金属製品	古銭	-	外径2.5	厚さ0.12	重さ2.6	-	-	-	不明
図7	53	調査区2	金属製品	古銭	-	外径2.4	厚さ0.16	重さ2.8	-	-	-	洪武通寶
図7	54	調査区2	金属製品	古銭	-	外径2.5	厚さ0.14	重さ2.4	-	-	-	大觀通寶

第4章 考 察

土尻遺跡の調査成果と課題

ここでは土尻遺跡の発掘調査成果を整理した上で、遺跡の様相やその周辺の歴史環境について考察を試みることとする。

遺跡の立地からみると、調査区西側には湿地帯が広がり、東側は利用可能な微高地が形成されていたことが確認された。平成10年度の試掘調査成果も参考にすると、東側には河川などの流路が入った痕跡が確認されていることから、本調査区付近における微高地の東西幅は比較的範囲が狭いことが予測される。特に調査区1では冠水による細粒砂層の堆積も確認されていることから、地形的に北から南への緩い傾斜があった様子が窺え、調査対象地北側から調査区2一帯にかけて舌状に延びた微高地末端を調査したのではないかと考えられる。

検出された遺構をみると、密度は薄く、重複関係からみて2つの時期が存在したことが明らかである。生活に関わる痕跡で言えば、溝跡と土坑、柱穴とみられるPitであるが、集落を形成した明確な建物などの構造物や生業に関わる遺構を特定するような成果は得られていない。

出土遺物の様相は、土器・陶磁器・石製品・金属製品・木製品がある。土器製品の主体はかわらけであり、その他の土器製品では、擂鉢、内耳鍋、香炉が出土している。擂鉢は瓦質と土師質が併存しており、内耳鍋は、砂質の強い信濃型鍋が多くを占めていた。陶磁器では天目茶碗や灰釉皿など古瀬戸後期段階の遺物が主体であり、最新の遺物として大窯段階の灰釉皿が1点のみ出土している。土器や陶磁器の年代は、かわらけなどの形態や陶磁器の組成からみて、概ね15世紀後半から16世紀初頭と考えられ、時代背景としては、隣接する小瀬村に守護武田家の一族である武田信賢が居を構え、この一帯に戦禍が及び始めた時期から、武田信虎による甲斐国統一が進められた時期と重なる。

用途別では、食膳具、煮炊具に加え、鍛冶関連の遺物であるフイゴの羽口や熔けた鉄滓の塊、砥石など鍛冶関連遺物が多数出土している。この成果と平成10年度調査成果と合わせると、土尻遺跡は、鍛冶職人が居住した集落の一部と考えられるのはないだろうか。ただし、遺構密度等からも本地点は集落の外縁である可能性が高く、鍛冶集落の中心は、本地点北隣りにある「鍛冶屋敷」の古字が残る一帯が有力と考えられる。

また、今回の調査で得られた遺跡の廃絶時期については、かわらけの形態や陶磁器に1点のみ大窯製品が搬入されていることを根拠にすると、15世紀末期から16世紀初頭と考えられるが、廃絶理由については、現時点で大きく二つの可能性が想定される。

一つは、年代的には武田信虎が甲斐国平定に向けて活動し、大井氏ら有力国人領主との間で争いが生じるとともに、駿河勢の侵攻を受けて甲斐国内で戦禍が絶えなかった時期であることから、戦乱の渦中で集落が荒廃、または再編されたとする人的要因を想定することができる。

もう一つは、検出された噴砂が物語る集落の罹災が原因とする見方もできる。明応7年(1498)に遠州灘を震源として、東海地域に甚大な被害をもたらした東海地震は、『勝山記』等の記録により3年間大きな余震が続いたことが記録されており、時期的には大きな齟齬はなく、その可能性も否定できない。いずれにしても、ここで結論を出すことはできないが、周辺地域の遺跡の様相も含めて今後検証していく必要がある。

参考文献

平凡社 1995『山梨県の地名 - 日本歴史地名大系 19 -』

甲府市教育委員会 2004『甲府市内遺跡 I』

甲府市教育委員会 2007『甲府市内遺跡 IV』

第5章 結語

甲府盆地は、東部から笛吹川、西部から釜無川の大河が南流し、流域は古来より幾多の水害に見舞われてきた。甲府盆地の湖水伝説など水にまつわる伝承が今なお語り継がれ、まるで低地部に集落は存在せず、人々の営みの痕跡である遺跡も存在しないかのような錯覚を与えてきた。調査対象地一帯も甲府盆地低地部の中央に位置しており、河川改修が進み、治水の整備が進む以前は洪水の常襲地帯であり、古い民家の軒先には小舟が常備されていたような場所であった。

そのような立地条件であるため、高い地下水位と厚く堆積した砂礫層の影響で、小規模の調査では深い掘削が困難であり、土尻遺跡周辺において現時点では古い時代の遺跡は確認されていない。平成13年度に本地点北東側の蓬沢町地内に所在する外河原ザクヤ遺跡において、地表下約1.4m～2.0mの深度で中世の遺構・遺物が出土し、その下層から古墳時代初頭の方形周溝墓などが調査されていることから、場所によっては深い位置に遺跡が眠っている可能性はある。低地部では旧地形が復元できないほど土砂堆積が進んでいるのが現状である。

しかし、今回調査した土尻遺跡では、現地表から僅かに0.3m程度下層で遺跡が確認されたことは驚きであった。確かに一部は洪水の影響を受けていたものの、遺構が検出された調査区2周辺は微高地を形成しており、良好な形で遺跡が検出されたことは、これまでの周辺調査でもなかつたことである。したがって、本地点周辺の標高は、中世からほとんど変化しておらず、むしろ遺跡を取り巻く周辺環境が洪水などの堆積によって埋没し、現地形を形成していることが確認されたことは大きな成果であった。

第4章でも述べたとおり、土尻遺跡は、15世紀後半から16世紀初頭に微高地上に展開した鍛冶を生業とする集落の一部であったことが判明し、遺物の出土量からみても活発な生産活動を行っていたと考えられ、甲府市南部の中世史を考える上で重要な成果であった。この集落は16世紀初頭に何らの理由で消えてしまい、記録に登場することはなかったが、本地点北側に「鍛冶屋敷」の古字が残されたことは、当時の人々の記憶の中にその存在が生きていた証拠とみるべきであろう。ちょうど南側には下鍛冶屋村と呼ばれた甲府市下鍛冶屋町が存在するが、なぜ下に対して上がないのか疑問であったが、もしかしたら、土尻遺跡一帯は、かつて上鍛冶屋村に相当していた可能性もあるのではないだろうか。この点については、推測の域を出ないが、今後の研究の材料になればと思う。

また、平成23年3月11日に発生した宮城県沖を震源とする東日本大震災などにより、災害史研究が見直されつつあり、地質学ばかりではなく、考古学的な遺跡の発掘調査成果についても注目されるようになった。大災害は起きないことに越したことはないが、水害は予測困難であっても東海地震は必ず発生すると想定されている。今回の調査成果によって危機感を煽るものではないが、大地に刻まれた結果については真摯に受け止め、今後周辺における防災対策の検討材料になることを切に願うものである。

最後になりますが、この報告書の刊行までに様々なご負担をいただいたばかりではなく、本市文化財保護行政と発掘調査について、ご理解とご協力をいただきました株式会社青山や関係者の皆様には、改めて感謝申し上げます。



調査区1全景



調査区2全景



調査前



調査区表土掘削状況



作業状況



調査区1確認状況



調査区1西壁断面



1号溝跡完掘



2号溝跡完掘



2号溝跡断面



1号土坑断面



1号土坑完掘



2号土坑断面



2号土坑完掘



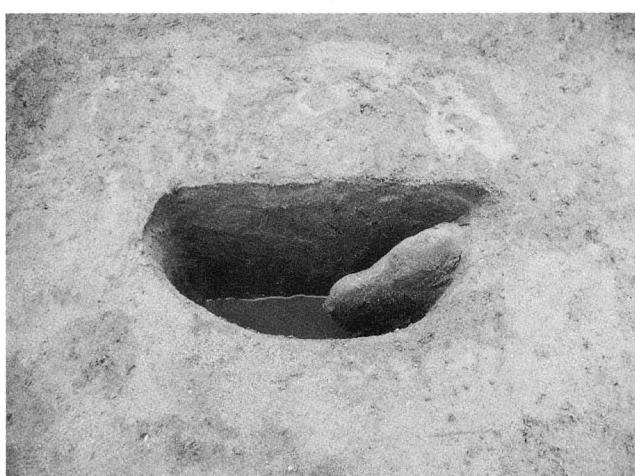
3号土坑断面



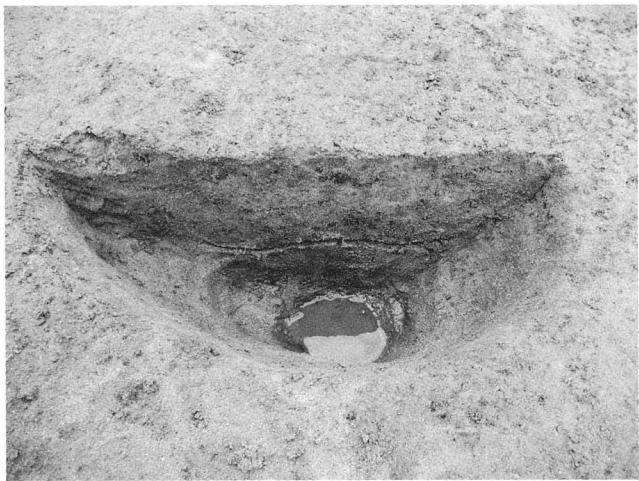
3号土坑完掘



Pit 1断面



Pit 2断面



Pit 5 断面



Pit 5 完掘



調査区 2 西側 湿地



調査区 2 西側 2号溝跡及び湿地



調査区 2 噴砂



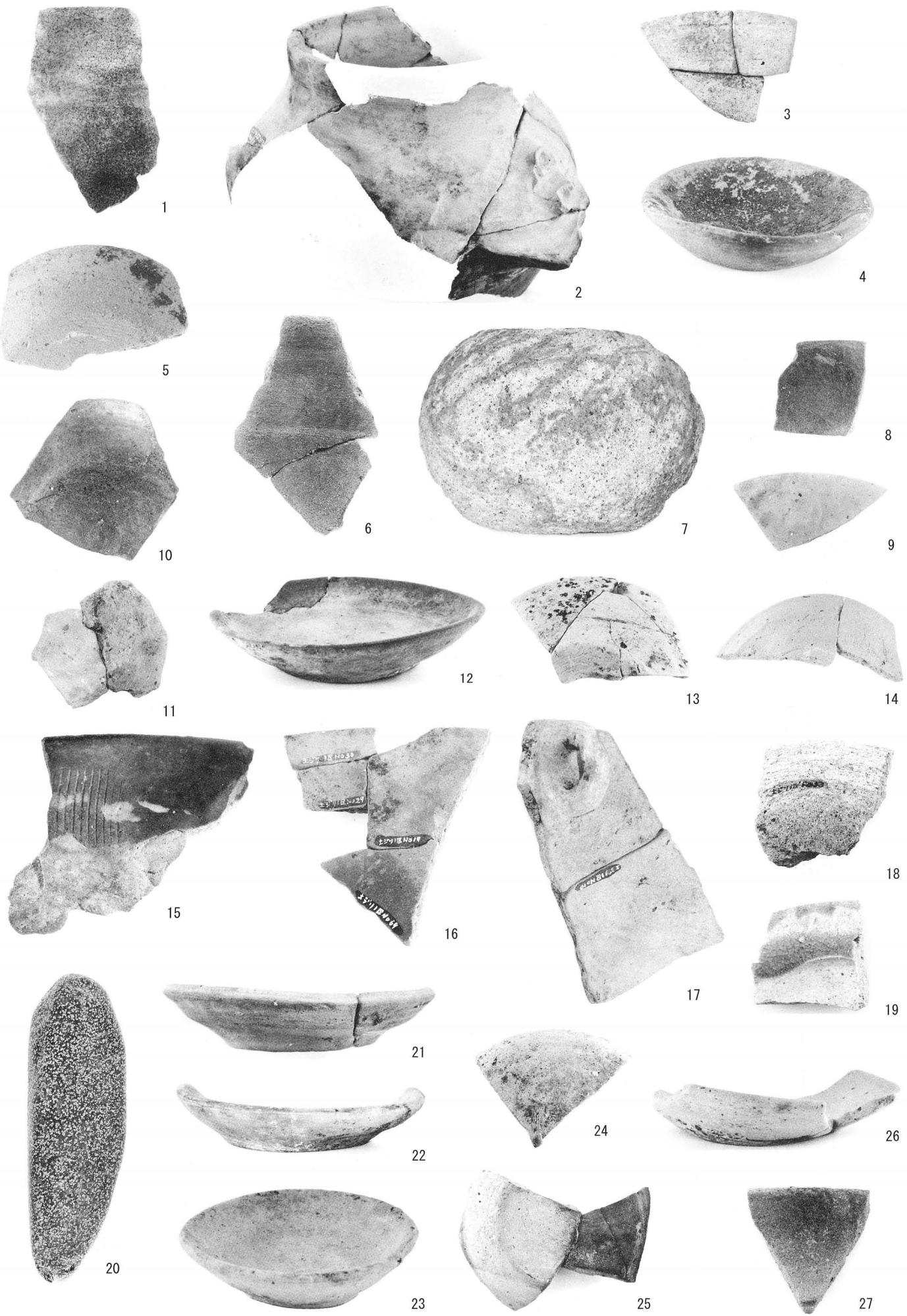
調査区 2 北壁 噴砂

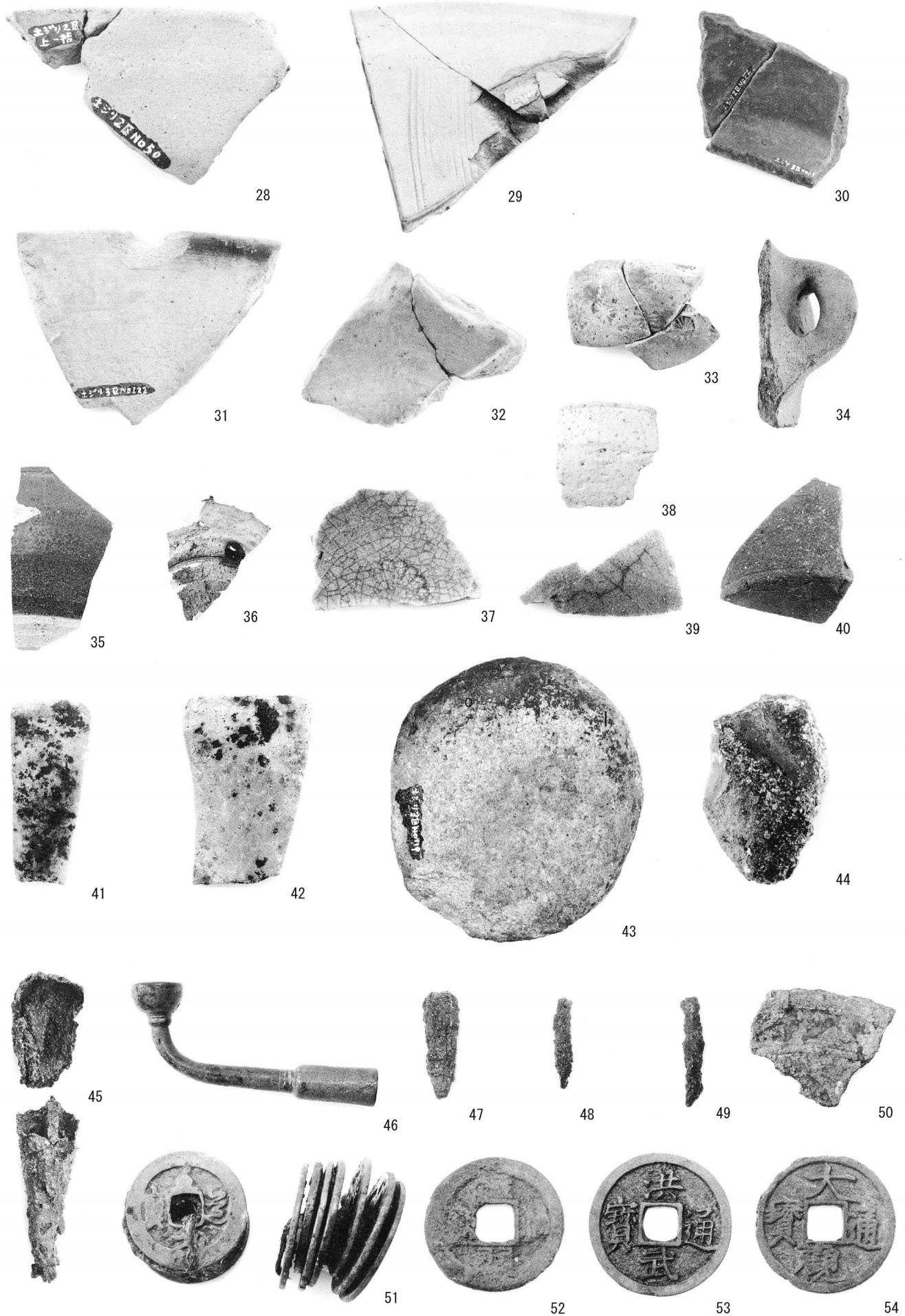


1号土坑 遺物出土状況



刺し銭出土状況





報告書抄録

ふりがな	どじりいせき I						
書名	土尻遺跡 I						
副書名	宅地造成工事に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	甲府市文化財調査報告書						
シリーズ番号	58						
編集機関	甲府市教育委員会						
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目 18 番 1 号 電話 055 (223) 7324						
発行年月日	平成 24 年 3 月 30 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査原因
どじりいせき 土尻遺跡	やまなしけんこうふし 山梨県甲府市 しもこがわらちょうあざどじり 下小河原町字土尻 36 番 1・38 番 1・ 58 番 1	市町村	遺跡番号	35° 37' 50"	138° 34' 50"	20110419 ～ 20110518	宅地造成工 事に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
土尻遺跡	散布地	中世	溝跡・土坑・柱穴		かわらけ・土器擂鉢・ 内耳鍋・陶磁器・古 銭・釘・五輪塔・砥石・ 鉄滓		

甲府市文化財調査報告 58

土尻遺跡 I

- 宅地造成工事に伴う発掘調査報告書 -

平成 24 年 3 月 30 日

発行 甲府市教育委員会

〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目 18 番 1 号

TEL 055 (223) 7324

FAX 055 (235) 5648

印刷 東洋レーベル株式会社

〒400-0032 山梨県甲府市中央五丁目 1 番 29 号

